

## エウエンキー語オルグヤ方言に ついての覚え書き

津 曲 敏 郎

### 1. はじめに

エウエンキー語はツングース語の一つで、エニセイ川以東のシベリアに薄く広く分布している。ロシアでのエウエンキー族の人口は3万人(1989年)、そのうちエウエンキー語を母語とする者は30.4%(9,120人)に過ぎない。いっぽう中国には鄂倫春(オロチョン)族(1990年6,965人)、鄂温克(エウエンク)族(26,315人)がいて、その一部は鄂倫春語、鄂温克語と呼ばれるエウエンキー語の方言を話している。話し手の数は鄂倫春語が2,240人、鄂温克語は全体で17,000人と見積もられているが(Hu et al. 1988)、後者の大半は実際にはソロン語という別のツングース語に分類されるべきものである。中国でいう鄂温克語のうち、本来のエウエンキー語の方言と見なせるのは、いわゆるハムニガン方言(朝克 1995では「鄂温克語メルゲル方言」とオルグヤ方言である。それぞれの話し手数は、ハムニガン方言が2,060人(朝克 1995:4)ないし1,000人以下(Janhunen 1990:14)、オルグヤ方言では324人(朝克 1995:4、オルグヤ以外での話し手も含む)に過ぎない。

この両方言については、これまでのところ、限られた記述しかないのが実状である(ハムニガン方言の記述としてJanhunen 1991、両方言を含む鄂温克語語彙として朝克 1995)。筆者は以前にハイラルでのこの両方言の語彙調査に基づき、報告を書いたが(Tsumagari 1992)、今回(1996年7-8月)きわめて短期間ではあるが、オルグヤ(正式には根河市敖魯古雅鄂温克族郷)の地を訪れて予備的な調査を行う機会があったので、そこで得られた資料の一部を以下に紹介したい<sup>1)</sup>。

## 2. オルグヤ・エウエンキー研究小史と現況

中国では最近まで、大興安嶺北西部でトナカイ飼育に従事する鄂温克の一派をヤクート（雅庫特）と呼び慣わしてきた。この「ヤクート語」なるものが本来のチュルク系の言語とは異なり、ツングース語にほかならないことは、すでに古く服部（1937；再録 1986）が現地調査によって確認している。この民族集団については、その後1942年今西錦司を隊長とする北部大興安嶺探検隊の報告書にも、トナカイ・オロチョンの名で登場し（今西 1991：333 ff., 357 ff.）、「ホロゴイヤ」という地名も言及されている（同：298, エウエンキー語での呼称については Tsumagari 1992：84 も参照）。1965年オルグヤへの定住化政策がとられ、以来ここが集団の拠点となっている。大塚（1988）は、今西隊から四十数年の空白を経てこの地を訪問・調査した民族学的報告である。中国からは、定住三十周年を記念して出版された孔（1994）がオルグヤ・エウエンキーの歴史と現状を統計的数値を交えて報告している。

敖魯古雅鄂温克民族狩獵文化博物館の展示資料によると、オルグヤ郷の人口は（おそらく1994年）現在504人で、内訳は鄂温克族219、漢族232、蒙古族33、達斡爾（ダグール）族7、満族9、俄羅斯（オロス）族4。主要産業は木材生産（1994年の総産値130万元、うち利潤36万元）とトナカイ飼育による鹿茸（強壯剤として珍重される）の生産・加工（鹿茸産量350万斤、産値20万2,500元；茸鞭宝酒産値130万元）である。

おそらく、この比較的自立した経済と、定住化政策による集団の維持、それに伝統に依存した生活様式の保持等の条件により、この地でのエウエンキー語の保存状況は、絶対数の少なさから危惧されるほどひどくはない、という印象を受けた。現に以下のエウエンキー語の情報を提供してくれた女性

---

1) 本稿は平成8年度文部省科学研究費補助金国際学術研究「東アジアにおける情報伝達と人間移動：南北の比較研究」（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 中嶋幹起教授代表）による成果の一部である。

は、40歳前の若さにかかわらず、しっかりした運用力を持っていたし、歌を聞かせてくれたのは30そこそこの青年だった<sup>2)</sup>。さらに上の世代になるほど、当然エウエンキー語の比重は強まる。特に村から数十キロ離れた山中にあるトナカイ放牧のキャンプ地では、中高年者の間でエウエンキー語の会話が日常的になされているのを耳にした。

もちろん上の数字にも見られるとおり、5百人ほどの人口の半分以上を漢民族が占める中で、行政、経済、教育などの公的活動はもとより、日常生活の大半も中国語で行われているのが現状である。エウエンキー語の会話は鄂温克族同士の私的なやりとりに限られると言ってよい。特に、漢族や他の民族との結婚によって家庭の共通語が中国語になり、また中国語の社会的優位が歴然としている中で、現に子供たちがエウエンキー語を習得しなくなっている以上、この方言は今後急速に衰退が進み、遠からず消滅に向かうと予測せざるを得ない。

### 3. オルグヤ方言の特徴

オルグヤ方言は、Vasilevič (1958) によるエウエンキー語方言の三大分類(南, 北, 東)のうち、東群の特徴を示す(Tsumagari 1992:87)。その分類の指標とされている単語の音韻対応と文法特徴のリスト(Vasilevič 1958:648-651)にそって、ここであらたにその位置を再確認しておく。あわせて、若干の音韻および文法上の特徴を指摘したい。以下において、語の表記を引用に際してあらためた部分がある(特に長母音は便宜上、長音符によらず母音字を重ねて示した)。

---

2) 調査にご協力下さった阿来克(Alaika)氏に感謝する。同氏は1958年、奇乾(Qiqian)生まれ。両親とも鄂温克族で、小学校へ入るまでは鄂温克語しか話さなかった。現在、漢人の夫と子供とは漢語で話すという。また歌を聞かせてくれた巴特古(Bategu)氏にも感謝する。さらに調査と歌詞の聞き取りには自身鄂温克族である朝克氏(中国社会科学院民族研究所)の助力を得たことを記して、謝意を表す。もちろん本稿中の誤りはすべて筆者の責任である。

### 3.1 Vasilevič の分類指標

#### (1) 音韻対応

Vasilevič は語頭および母音間での *s* の対応に注目し、南群の下位方言としての S 諸方言 (*s-*, *-s-*) および } 諸方言 (*ʃ-*, *-ʃ-*)、北群 (*x-*, *-x-*)、そして東群 (*s-*, *-x-*) を分ける重要な指標としている。リストされている単語について、オルグヤ方言の形をあげると、*saa*「知る」、*sii*「おまえ」、*seen*「耳」；*axii*「女」、*eexa*「目」であって、東群と一致することがわかる。母音間に準じる対応を示す例として、「雲」を表わす語がリストにあり、南北両群では *tuuksu*, *tuukʃu* 等の形をとるが、オルグヤでは *tuuxu* であり、東群のうちでも特にアルダン、ゼーヤ方言の形と一致する。リストにはさらに東群形で *səxin* “*tabun* (鹿などの群れ)” の語があるが、これにあたる語は得られなかった。

次に母音間の *g* の対応がある。これは南群 } 諸方言のみ  $\phi$  (ゼロ) または *w* が対応し、他ではすべて *g* が保たれている。オルグヤでも *togo*「火」、*tugə*「冬」である。

語頭の *x* (<\**p*) については、南群 S 諸方言と北群、それに多くの東群はこれを保存している (オルグヤ *xalɣan*「足」、*xəŋɣən*「膝」)。南群 } 諸方言と一部の東群では  $\phi$ -の対応も見られる。

語頭の *l* は、北群では一貫して *l* だが、南と東では方言により、また語によって、*l* の場合と *n* の場合がある。リストにある *luɣur*「夕方」はオルグヤでは得られなかったが (「夕方」は *axeltana*)、*loko-*「掛ける」で *l* の対応が確認された。

語中子音群の対応例として *ld/ll*, *nd/nn* が取り上げられている。これも各群の中で方言による差があるが、オルグヤでは *ollo*「魚」、*nanna*「皮」と、子音同化した形が現れる。

#### (2) 文法特徴

Vasilevič のリストには、いくつかの文法特徴の方言差もあがっている。はじめに 2 桁の数詞の構造の例として「十二」をどう表わすかが、方言によっ

てかなり異なることが示されている。jaan-juur (十一) と単純に並べる言い方が各群に共通して見られるいっぽうで、特に南群S諸方言では juur-jaa (二十), juurjaakin juur (二十の方へ二), juurjaaləkə~juurjəxələkə (二十一-余り) のようなバラエティが見られる。最後の juurjaaləkə は〔諸方言にも分布している。北群と東群には, jaanduk juur (十から二) があり, これがオルグヤの形でもある<sup>3)</sup>。東群でこの形が現れるのはアルダン, ウチュル方言とされている (Cincius et al. 1975:248 ではゼーヤ方言も)。

次に1人称単数代名詞の対格形「私を」が, minə となる方言 (南群S諸方言, 北群) と minəwə となる方言 (南群〔諸方言) とがある。東群には両方があるが, オルグヤでは minə である。また「私自身」を表わすのに, 再帰代名詞の人称形 mænmi によるか, 主格代名詞と mænəkəən の組合せによるかも, minə/minəwə と同じような分布をする。オルグヤ方言は mænmi の形をもつが, 主格代名詞と並べて bii mænmi の形で得られた。「自分で」にあたる mænji も得られた: bii mænji ɲənəjiŋəw. 「私は自分で行く」。

「二人の人」と言うときに数詞のあとの名詞が複数接尾辞-lをとる方言ととらない方言が各群に見られるが, 東群では一般にとらないとされている。オルグヤでも juur bəjə である

異時副動詞「～してから」には, 方言によっていろいろな形があるが, オルグヤでは-xa が確認された: čaija umi-xa siluujiŋəw. 「私は茶を飲んでから(飯を)食べる」。これは Vasilevič のリストによると東群ゼーヤ方言の形と一致する。

リスト最後の項目は, 形容詞と名詞の一致 (agreement) に関する方言差である。すなわち「高い山(複)に」のような句で, 数と格の標識の現れ方に差があって, 完全な一致を示すもの (gugda-l-duu urə-l-duu 高い-複数-与格山-複数-与格: 南S, 北のそれぞれ一部) から, 数のみ一致するもの (各群

3) ちなみに服部 (1986:62) の調査した「ヤクート」では, 「十一」に対して [dʒaan əmkU:ŋ] とある。

にある), 全く一致を示さないもの(東群の一部)まである。また格語尾が形容詞のほうにだけ付く方言(南S, {の各一部)もある。オルグヤ方言は一致を全く示さない点で、やはり東群の特徴を共有するが、この例では名詞にも複数接尾辞の付かない形(gugda urə-du)でしか得られなかった。

### (3) オルグヤ方言の位置

以上に検討したところから、オルグヤ方言は Vasilevič の分類による東群に属することがあらためて確認された。なかでも、指標とされた特徴の多くでゼーヤ方言と一致することが注意されよう。

## 3.2 母音音素 $\theta$

さて池上(1976:169-172)はエウエンキー語東部方言の話し手(ゼーヤ出身)からの調査資料に基づき、この方言で動詞語尾の母音が a ~ ə ~ o ~ u の交替を示すものがあることから、最後の u は \* $\theta$ [ $\dot{o}$ ] (中開き中舌円唇母音)であった可能性があり、u を含む語尾をとる語幹の母音 u (の少なくとも一部)もエウエンキー祖語においては \* $\theta$  であったと推定している。そしてエウエンキー語の中に今も  $\theta$  を保つ方言がありうることを示唆している<sup>4)</sup>。

いっぽう朝克(1995:6, 12)はオルグヤ方言に /i, e, a, ə, o,  $\theta$ , u, u/ の 8 つの短母音を認め、この  $\theta$  が鄂温克語ホイ方言 (=ソロン語) の  $\theta$ , 同メルゲル方言 (=エウエンキー語ハムニガン方言) の u または ə に対応する場合があるとして、次のような例をあげている: オルグヤ  $\theta m\theta x\theta$  || ホイ  $\theta m\theta\check{c}\check{c}\theta$  || メルゲル  $umugsu$  「氷」; オルグヤ  $x\theta n\theta$  || ホイ  $\theta n\theta$  || メルゲル  $\theta ntu$  「別の」。オルグヤ方言のこの両語は今回の調査でもこの形で確認された。その母音はたとえば  $o\theta okto$  「鼻」の o [ $\omega$ ] とは明らかに違っているし、 $umukta$  「卵」,  $umuk\theta n$  「一」の u [ $U, u$ ] と異なるようである(な

4) 池上先生は、筆者らの1988年オルグヤ方言調査の録音テープで、以下にあげる  $x\theta n\theta$  の語を聞かれ、その母音が / $\theta$ / に該当しうることを示唆された。同先生のご教示に謝意を表したい。

お、これらの *u* も朝克の立てるような別個の音素 /*u*, *u*/ と見るべきかどうかはさらに考えねばならない問題である)。この点についてはまだ調査・分析が必要であるが、*θ* が音素としてオルグヤ方言に存在する見通しは高いと言える<sup>5)</sup>。なお同じく中国のエウエンキー語方言である鄂倫春語でも *θ* が区別されており、*əŋtə* 「別の」の語も見える(胡 1986: 15, 「氷」は *umukʃu* 同: 190)。

ちなみに *əməxə*, *xəntə* の語について、エウエンキー語諸方言を含む他のツングース諸語の対応をあげておく (Cincius et al. 1977: 268, 349-350): エウエンキー *umuu*, *umuuksu*, *umuuksə* 等 || ソロン *əmukčiči* ~ *əmutčiči* 「氷」; エウエンキー *xuŋtu*, *uŋtu*, *xuntu* || ソロン *əntuu* || エウエン *xəəntə*, *xəəntə*, *xuuntə* 等 || ネギダル *xəŋtə* || オロチ *xonto* ~ *xoŋto* || ウデヘ *xoŋto* || 満州 *ənču* 「別の」。このうちソロン、エウエン、ネギダル語には *θ* の存在が知られており、この語例でもソロン *əntuu* を除いて (ただし上述ホイ方言 *əntə* も参照), *θ* が対応している。このほかウイльта語、さらにオルチャ語にも *θ* があるとされているが (池上 1976: 172) この語例に対応する語形はないようである。

### 3.3 所有構造

文法上の特徴として、名詞および代名詞の所有構造をとりあげておく。中国のツングース諸語は一般に属格を発達させているいっぽう、名詞の所属人称語尾が随意化し、譲渡可能接尾辞が見当たらない、という共通特徴がある (津曲 1996)。この点で、さらに精査を要するが、オルグヤのエウエンキー語も例外ではないと言えそうである。

5) ちなみに服部 (1986: 64) には、[*okomni:*] 「乳 (milk)」の語が見えるが、*ɔ* と区別されたこの母音は (少なくとも音声的には) *θ* を表わすものかもしれない: cf. エウエン *əkən* || ネギダル *əxən* || ウイльта *kəθ* 「乳」(前二者は Cincius et al. 1977: 255, ウイльта語は池上 1980)。ただし朝克 (1995: 70) によるオルグヤ方言形 *ukʊŋ* も参照。

代名詞の属格の例：min-ŋii ŋaala-w [私-属格 手-1単]「私の手」。この場合人称語尾-w はあるのが普通だが，省略も可とのこと。

名詞属格の例：oron-ŋii ullə「トナカイの肉」，bira-ŋii ollo-n「川の魚」，bira ollo-n「同」。名詞にも属格があるが，属格あるいは人称語尾（-n 3人称単数）のどちらかのみで所有関係を表わすこともできるようである。

また，min-ŋii ollo(-w)「私の魚」のような例からうかがえるように，他のエウエンキー語方言（およびロシア領のツングース諸語）には見られる譲渡可能性を表わす接尾辞（次例では-ŋi）は見出せない：cf. エウエンキー ollo-ŋi-w「私の魚」（Sunik 1947：439），jili-ŋi-w「私の（獣などの）頭」（Konstantinova 1968：74）。後者は，譲渡可能性の区別をもつ言語では，jili-w「私の（自分の身体の）頭」と対比されるが，オルグヤ方言の場合，もっぱら自分の身体の頭を意味して min-ŋii dili-w と言うだけである。もし動物（たとえばトナカイ）の頭であれば，min-ŋii oron-mi dili-n [-mi は n のあとの1単]「私のトナカイの頭」と言うしかないとのことである。

#### 4. 歌テキスト1例

最後にオルグヤ・エウエンキーの歌1例を紹介しておく。通して1分足らずの短い歌で，1番がエウエンキー語（オルグヤ方言），2番が中国語で歌われる。内容は両言語ともほぼ同じで，人民解放軍への賛歌であるが，朝克氏によるとメロディ（楽譜参照）は伝統的なものだろうという。表記のうち特に母音の長さについては，語としての発音をさらに確認する必要があることを付言する。

əwəŋkii	[訳] エウエンキー族
gugda urə ʃagdan niində umukən	高い山の松の根は一つ
saldaadil minŋun umukən meewan	軍人たちは私と一つの心
bistəriikən muunin bidam ŋonim	激流河の水はきわめて長い
saldaadil aja ʃalin aja	軍人たちは優しく気だてがいい



əwəŋkii ətæərə omɲoro エウエンキー族は忘れない  
 əwəŋkii ətæərə omɲoro omɲoro エウエンキー族は忘れない, 忘れない

高山上的青松啣根連根  
 解放軍和咱們心連心  
 激流河水流水啣長又長  
 解放軍的愛民志氣高  
 鄂温克獵民永不忘  
 鄂温克獵民永不忘 永不忘

## [訳注]

niində : 朝克 (1995 : 37) によるオルグヤ方言形 niintə 「根」。cf. ŋiŋtə  
 ~niŋtə (Cincius et al. 1975 : 662)。

saldaadil : <ロシア語 soldat に複数接尾辞-1。

minɲun : -ɲun は共同格語尾 (Bulatova 1987 : 25)。

bistəriikən : オルグヤを流れる激流河のロシア名 bystraja から。-kən は  
 指小辞。

muunin : muu 「水」は実際の演唱では moo のように聞こえるが、後ろの  
 ŋonim (第一音節は長く歌われる) との一種の押韻的現象か。

jalín : cf. jal “um, mysl’, xarakter” (Cincius et al. 1975 : 244)。

ətæərə : 否定動詞 ə- の意志未来 3 人称複数形 (Vasilevič 1958 : 730)。

## 参考文献

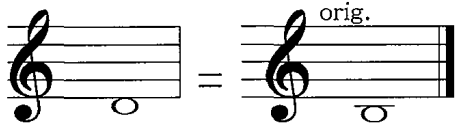
Bulatova, N. Ja. 1987 *Govory evenkov amurskoj oblasti*. Nauka, Lenin-  
 grad.

朝 克 採録・著, 津曲敏郎 編 1995 『鄂温克語三方言対照基礎語彙集』  
 小樽商科大学言語センター, 小樽.

Cincius, V. I. et al. (eds.) 1975, 1977 *Sravnitel’nyj slovar’ tunguso-man’čj-*

- urskix jazykov* 1, 2. Nauka, Leningrad.
- 服部四郎 1937 「大興安嶺北部における謂わゆるヤクート族について」『音声の研究』6 (再録『服部四郎論文集1』三省堂, 東京, 1986).
- Janhunen, J. 1990 *Material on Manchurian Khamnigan Mongol*. Finno-Ugrian Society, Helsinki.
- \_\_\_\_\_ 1991 *Material on Manchurian Khamnigan Evenki*. Finno-Ugrian Society, Helsinki.
- 胡 增益 1986 『鄂倫春語簡志』民族出版社, 北京.
- Hu, Zengyi et al. 1988 “Manchu-Tungus languages”. In: S. A. Wurm et al. (eds.) *Language atlas of China*. Longman, Hong Kong.
- 池上二良 1976 「エウエンキー語方言語彙 (承前)」『北方文化研究』10, 北海道大学文学部, 札幌.
- \_\_\_\_\_ 1980 『ウイльта語基礎語彙』北海道大学文学部言語学研究室, 札幌.
- 今西錦司 編 1991 『大興安嶺探検』朝日文庫, 東京.
- 孔 繁志 1994 『敖魯古雅的鄂温克人』天津古籍出版社, 天津.
- 大塚和義 1988 『草原と樹海の民: 中国・モンゴル草原と大興安嶺の少数民族を訪ねて』新宿書房, 東京.
- Sunik, O. P. 1947 “O kategorij otčuždaemoj i neotčuždaemoj prinadležnosti v tunguso-man’čžurskix jazykax. *Izvestija akademii nauk SSSR* 6/5, Leningrad.
- Tsumagari, T. 1992 “A basic vocabulary of Khamnigan and Oluguya Ewenki in northern Inner Mongolia” 『北方文化研究』21, 北海道大学文学部, 札幌.
- 津曲敏郎 1996 「中国・ロシアのツングース諸語」『言語研究』110, 日本語学会, 京都.
- Vasilevič, G. M. 1958 *Evenkijsko-russkij slovar’*. Moskva.

əwəŋkii (鄂温克)



巴特古 演唱  
津曲敏郎 注音・採譜

♩ = 107 (whole duration 56")



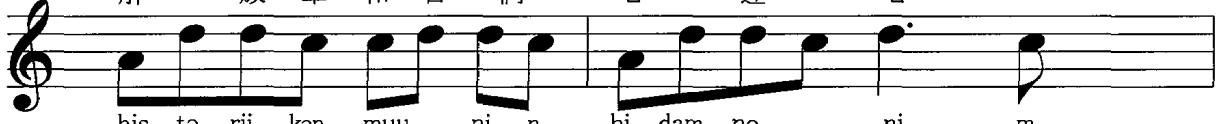
1. gug da u rə ʒag da n niin də u mu kən

2. 高山上的青松 哟 根 连 根



sa l daa dil min ɲu n u mu kən mee wan

解 放 军 和 咱 们 心 连 心



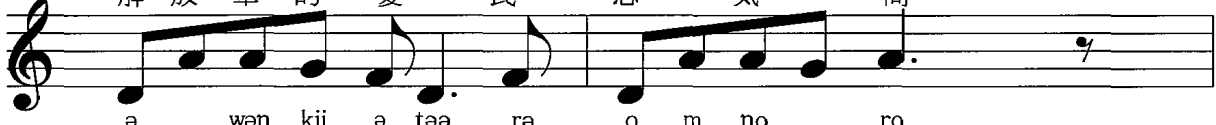
bis tə rii kən muu ni n bi dam ɲo ni m

激 流 河 水 流 水 哟 长 又 长



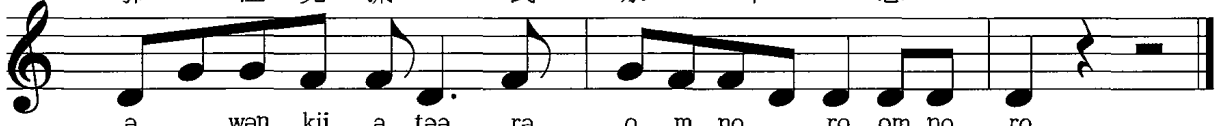
sa l daa dil a ja ʒa lin a ja

解 放 军 的 爱 民 志 气 高



ə wəŋ kii ə tæ rə o m ɲo ro

鄂 温 克 獭 民 永 不 忘



ə wəŋ kii ə tæ rə o m ɲo ro om ɲo ro

鄂 温 克 獭 民 永 不 忘 永 不 忘